

性教育絵本の分析(1)

—研究の展望—

池田政子

1. 「性教育絵本」の登場

「性教育絵本」という言葉は、筆者の知る限りでは、1972年初版の『なぜなの ママ?』（アーニ出版）の中にはさみ込まれた、この本を紹介するカードに初めて使用されている。^{*1} また、「現代性教育研究」1977年2月号でアメリカ合衆国で出版された“Did the Sun Shine before You Were Born?” が「3～7才児のための性教育絵本」と題して紹介されている。¹⁾ 現在、出版界で「性教育絵本」という言葉が用語として確立されているかどうかは不明だが、最近このような名称で呼ぶことができるような「性」を扱った幼児・児童向けの出版物が確実に増加して来ている。附表の分類Ⅰ—1, Ⅰ—2の図書は、明確に「性教育」ということをうたっているものを含め、作者のあとがきなど、本のどこかに“「性」を子どもたちに伝える”という意図を明示（備考欄参照）しているものを筆者の知る限りでリストアップしたものである。これを見ると、そのほとんどが、ここ10年程の間に出版されたものであり、特に70年代後半に入って急に増加していることが指摘できる。この現象の背景を考えるに、1つには、「性教育の必要性」が叫ばれるような社会的状況があったと思われる。たとえば1971年の総理府の調査²⁾によると、15～24歳までの子どもを持つ父親・母親(40歳代49%, 50歳代36%)の7割が「現在、性道徳は乱れている」と答え、5～6割が「マスコミの性描写が多すぎ、内容も質が悪い」と判断している。1972年2月に文部大臣の認可を得て発足した「日本性教育協会」は、同年5月同協会編集の「現代性教育研究」（季刊として）を創刊しているが、この冒頭に「協会設立のご挨拶」として次のように述べられている。

「性に関する価値観と風俗は急速に多様化し、変貌しつつある現代——この風潮の中でわが国のみならず、世界各国とも若者と成人の間には性意識、性行動に大きな断絶があります。これにたいして共通理解の尺度と対話の広場がないのが実状です。このような状況の中で、家庭・学校・社会のそれぞれの場において、性に関する望ましい認識が育てられ、適切な教育が行なわれることが待たれておりましたが……（後略）」

この創刊号に既に「家庭での性教育／乳幼児期を中心に」（平井信義）が掲載されており、同協会として、性教育の対象の範囲は乳幼児期まで含まれて考えられていることが明確になっている。その後も「実践資料」として、幼稚園・保育所等での指導事例を載せており、また、1974年には「ゼロ歳から二歳児の性教育」と題し、Edna S. Lehman 著 “Talking to Children about Sex”³⁾ の抄訳が紹介されている。その後同誌は1976年8月の第17号より隔月刊となり現在に至っている。この日本性教育協会の発足・活動と性教育絵本の出現・増加とはほぼ時期を同じくしているとみてよいであろう。

前述の総理府の調査によれば、「子どもと性についてよく話し合った」と考えている親は約1割しかおらず、「話し合わなかった」親の約半数は「自然に覚えるものだから」という理由を挙げている。一方で、「自信を持って性教育できるか」という問いには、約6割が「できると思う」と答えているが、その内容は「妊娠・出産」「家族計画」「性道徳」であり、「避妊・中絶」「性交」「性欲」について自信を持って教育できると答えた者はほとんどいなかった。そして「性教育は誰が行なうのがいちばんいいと思うか」という問いに対し、6割が「学校の先

*1. このカードが初版当時から挿入されていたことは、アーニ出版編集部の野尻鷹雄氏よりの私信にて確認。

生」「医師・保健婦」と答え、「両親」としたのは約2割に過ぎない。また「『赤ちゃんはどこから（またはどうして）生まれるのか』と聞かれたことがある」のは、父親1割弱、母親3割弱であり、その約半数が子どもが6歳以下の時、3割が7～9歳の時であるが、その時母親の46%が「当惑してうまく答えられ」ず（父親では30%）、「できるだけ科学的に教えようとした」のは母親の22%、父親の34%という結果であった。この調査からは、「性」をめぐる状況を憂慮しながらも、子どもに積極的な「性教育」は行なって来ず、またその役割を担う自信もないこの世代（現在の50～60歳代）の親の姿をイメージすることができる。現在幼児を持っている若い母親（主として20歳代後半から30歳代後半の年齢層）を対象とした石原準子らの最近の調査によっても同様である。これによれば、3歳児の母親の3割、5～6歳児の母親では7割が「赤ちゃんが生まれること」についての質問を受けたことがあると答えている。そして、質問された母親のうち、石原らの基準で、たとえば「お父さんの種とお母さんの卵がいっしょになって赤ちゃんができる」というような「正しい」答をした者は1割に過ぎず、残る9割の母親はたとえば「おなかから生まれてくる」というような漠然とした答え方をしているという結果であった。このように、日本性教育協会の設立に代表されるような、性に関する状況の変化に対する社会的な動きを背景に、子どもとの関係でこの変化への具体的な対応策を持たない親たちにアピールするものとして「性教育絵本」は登場して来たとみることができよう。

そして、もう1つ、「性教育絵本」の質（どのような「性」を伝えるか）に変化を起しつつあるものとして、「ウーマン・リブ」の運動の影響を指摘しておきたい。「現代性教育研究」でも既に第3号（1972）で、「特集 男らしさと女らしさを考える」、「性差の心理学」、「海外資料 男性と女性の役割について」などが掲載されているが、「性教育」に「性器教育」以上のものが求められるとなれば、それは必然的に男女の関係のあり方、性役割というような問題を含んでくる。一方で、男女の関係について従来の伝統的な価値観を超えたものを創り出

そうとする動きは、当然「性」という領域にもかかわってくる。この立場から積極的に「性」を子どもたちに伝えようと、「両性が平等に平等に解放された上で、お互いの心を解き、体をいたわりあって、生きている一つの事がらとして性を楽しむことが、はじめであり、おわりまでそうありたいのです」『赤ちゃんバンザイ』より、附表参照）、あるいは「両親と男の子、女の子が一緒に性を学び人生を語ることでできるような絵本」（『こんにちは、しょうさん』より、傍点は筆者、附表参照）というような主張をこめた絵本が作られ始めていることに注目すべきであろう。

2. 研究対象としての「性教育絵本」

「性教育絵本」という対象には、次のような要素が含まれる。「性」とは何かということ、それを「教育」とはどういうことかという問題、さらに「絵本」による性教育ということの意味である。それゆえ、「性教育絵本」を研究対象とするにあたっては、その基礎として次の2つの観点が必要である。

〔A〕「性教育」とは何か、特に幼児に対する性教育とは何かということ。（既存の概念、実践の検討と新しい方向性の模索）

〔B〕「絵本」がメディアとしてどのような特質を持つかということ。

筆者の関心の中心は〔A〕であるが、既にある「性教育絵本」という対象を手がかりとしてこれを考えてゆこうというのが、現在の立場である。それにしても、そのためには、どんな絵本を「性教育絵本」という対象として特定するかという手続が必要になってくる。附表のリスト作成にあたり、分類Ⅰのグループ（選択の基準については前節で既述）以外に分類Ⅱのグループを加えた理由もこのことと関係する。分類Ⅰの図書には、男女の身体的差異、第二性徴（おとなへの変化）、異性への感情、結婚、性交などの内容が含まれており、いわば“狭い”意味での「性」を扱ったものであるのに対し、分類Ⅱとして選択した図書は受精以降の過程を中心に扱ったものが多く、「生・生命」に重点を置いた内容となっている。これを「性」を扱

った」図書⁵⁾として位置づけたのは、筆者が遠藤(1981)の次のような主張を支持することによる。「最近たくさんの本が出されて、産みへの道すじ、体についてかなりはっきりしてきました。これらの本の底に流れるものは、生きる中にある性なのだとすることを前提にしているものと私は思います、しかし、そのことについてはあまりふれられていません。—中略—性の解放は生の解放なのです。」筆者にとって「性教育」とは、生命をうみ出し、育て、看取るという連続的な過程と、その過程に女と男両性がどうかかわってゆくかという事に関する教育であり、その「かかわり」は(前節の引用にあるように)「両性の対等な解放」と「男も女も共に」という方向性を明確に含むものでありたいと考える。

〔B〕は、性教育と絵本との関係、すなわちなぜ絵本による性教育なのかということと関連する問題である。前述のように、この背景には幼児も性教育の対象として位置づけられる一方で、それに対応しきれない親を補助する「教材」として「絵本」が求められたという事情がある。すなわち、対象が幼児であるがゆえに絵本なのだ、という関係である。佐々木(1980)⁶⁾は絵本の「絵」の意味を2つに分類している。1つは「さし絵」的な絵、すなわち「幼児の言語的思考の未熟さを補うため、絵、図式などの形象的手段を使っているもので、子どもの発達にともなって児童文学や科学読み物に置きかわってゆくもの」。それに対し、「感覚的・直覚的形式としての絵本」があり、これは「おとなにとっても子どもにとっても絵本でなければならない絵本」であるという。「性教育絵本」の「絵」は、この分類を適用すれば前者のカテゴリーに属すると考えられるが、さらにもう1つ、性を扱う絵本であるが故の特別な機能を持っていると思われる。もし、子どもの言語的未熟さを補うということが絵の唯一の機能であるなら佐々木による前者のカテゴリーに属する絵本の絵は、たとえば「写真」によって置き換えることも可能であろう。事実、幼児向けの動物や乗物の「絵本」の中には、「絵」の代りに実物の写真を使用しているものもある。しかしながら「性教育絵本」の場合、このような可能性はほ

とんど考えられないし、実際、附表にリストアップされた絵本には、写真を用いたものはない。「性」というテーマ自体が写真ではなく、「絵」や「図式」を要求しているということを指摘しておきたい。これには2つの場合がある。第1に、たとえば「受精」のように写真を用いることがもともと技術的に困難である場合。第2は「男女の身体的差異」や「性交」のように、写真を用いることが可能であっても、そのことに抵抗が強い場合である。したがって、二重の意味で「性教育絵本」にとっては「絵」が重要な意味を持つと考えられるが、「心理学者が絵本の研究に接近していく場合—中略—言語の分析を中心にするものが比較的多く」⁶⁾、絵についてはほとんど未開拓というのが現状である。

以上は、絵本のメディアとしての特質のうち絵による伝達という面に触れたものであるが、特質はこれのみでない。絵本を媒体としての伝達の過程が多様であること、それにともなって伝達内容も多様化すること、すなわち同一の絵本であっても伝え手が違えば受け手である子どもに違った内容が伝達される可能性があることなども、際立った特質であろう。絵に関するメッセージ(伝達内容)が、絵本という媒体を通じて子どもに伝達される過程を図示すると、図1のようになるであろう。この過程は性教育絵本を対象とする研究の枠組にかかわってくる。

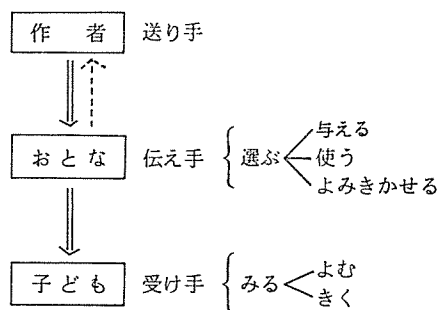


図1 絵本による性に関するメッセージの伝達過程

3. 研究の枠組

前節の2つの観点を踏まえ、現在出版されている性教育絵本を対象とした研究の枠組を以下のように設定することができる。

(1) 絵本の構造の分析(対象としての絵本それ自身の形式と内容)

これには、性のどんな側面を扱っているかというメッセージの内容、文・絵による表現方法、登場人物の関係、語りの形式、時間的構成などが含まれる。佐々木⁶⁾の言うように、絵本は「あくまでも、おとなが子どものために、ある目的をもって創りあげた『既成品』である」。これは図1の伝達過程のうち、送り手である作者が性について何を子どもたちに伝えようとしたか、そしてそのためにどのような表現手段を取ったかということにかかわっている。ただし、後述のように受け手である子どもと作者の間には、「選ぶ」という機能を持った伝え手としてのおとな(両親、教師など)が介在するがゆえに、作者の送る伝達内容や表現は、程度の差はあるにしても、ともかくも、おとな(伝え手)に受容されるものでなければならないだろう。したがって、作者が伝達内容を決定する際には、伝え手である「おとな」に拘束を受ける可能性がある。この意味で様々な絵本の構造を比較・検討することは、その絵本の作者のみでなく、「おとな」が性について子どもに何を伝えたいと考えているかということ推測するための1つのアプローチとしても位置づけ得る。また、上にいくつか挙げた項目のように、絵本の構造を記述し得るような次元を見出すことは、次に述べる(2)に対して分析の枠組を与えるための基礎となることはもちろんである。

(2) 伝え手(おとな)と受け手(子ども)の絵本に対する反応の分析

佐々木⁶⁾は、「絵本は、その選択をいくら子どもにまかせたとしても、そこに読み手が介在しない限り絵本としての機能を果たさない」と述べているが、「おとな」の第一義的な機能は「選ぶ」ということであろう。絵本に盛られたメッセージは直接には子どもに向けられたものであるが、そこには必ずメッセージの伝え手としてのおとなが介在する。経済的手段を持たない

年令の子どもが手にする絵本については、子どもの「選ぶ」(どの本をみるか、よむかについての決定)は、あったとしてもそれ以前におとなの「選ぶ」を通過してきた範囲のものに限られる。たとえば学校の図書館で子どもが自ら選択した場合にも、その本を蔵書とするについておとな(教師あるいは司書)の「選ぶ」という行為が介在しているのである。したがって、絵本の作者から子どもに向けられたメッセージのどの部分、どのような表現が、伝え手であるおとなに受容されたり拒否されたりするかという問題は重要である。このおとなの反応は子どもに直接かかわるおとなたちが伝えたい「性」の内容を反映していると考えられる。また、この反応は「選んだ」後どんな役割(図1)が伝え手によって取られるかということにも関係してくる。一方、メッセージの受け手である子どもの反応を知することは、作者のメッセージおよびそれを伝えたおとなの意図が、的確に子どもに伝わったか否かを知ることであり、また、その新しい情報によって、子どもがそれまで持っていた性についてのイメージをどのように修正し再構成したかを知ることである。このことによって「性教育のための絵本」の価値が吟味されることになる。

(3) 伝え手と受け手の関係および交互作用の分析

これは、ある絵本が実際にどのように利用されるか、つまり、絵本を中心に伝え手と受け手がどのような社会的交互作用を行なうかということに関するものである。複数のおとなが同一の絵本を選んだとしても、その後の伝達過程における「伝え手—絵本—受け手」の関係は多様である。1つは社会的文脈における両者の関係の形式、たとえば「保母と保育園児」か、「母親と子ども」か、「教師と児童」かといったような事がらや、子どもの年令に規定されて。もう1つは(もちろん、上のこととも関連するのだが)、図1に示された、伝え手と受け手に可能な役割の組み合わせのうちどれが採用されるか、いわば場面的文脈における両者の関係の形式の故に。そして、この決定も多くは伝え手が行なうことになる。たとえば、読字不可能な子どもに全文を「読みきかせる」場合には、

「おとな・読みきかせる—子ども・みる,きく」という関係になるが、絵本の内容を絵にせよ、文にせよ、おとなが選択的に伝える（「性交」にかかわる部分はとばすといったように）とするならば、性教育の教材の利用者としての面が強くなり、「おとな・使う—子ども・みる,きく」という関係であると言ってよい。また、読字能力のある子どもに対し、親が選んだ絵本を直接読みきかせるのではなく、目につく所に置いておいて、子どもが自発的に読むというような場合には、「おとな・与える—子ども・みる,よむ」という関係となろう。さらに、上の2点に関連して子どもが絵本に接する場面（メッセージの伝達場面）での伝え手と受け手の人員構成も問題である。伝え手と受け手が1対1の関係であるか、伝え手が1で受け手が複数であるか、また子どもがひとりで読む場合のように伝え手はその場面にはいないこともあり得るし、さらにたとえば幼稚園で子どもたち同志一冊の絵本を囲んでみるように、その場面には伝え手が不在で受け手が複数という場合もあろう。その他にもいくつかの場合が考えられるが、このような伝達場面での人員構成は、同一の絵本による伝達であっても受け手である子どもの反応に差を生ずるような影響を与え得るし、また、伝え手が個々の役割を実行する場合の方法にも影響すると考えられる。「よみきかせる」場合にも、受け手がひとりの場合と複数いる場合とではその方法、たとえば声の大きさ、発話の速度、間の取り方、表情、動作などが（意図的か否かは別としても）変化することは当然である。

以上、絵本を媒介とする伝え手と受け手の交互作用の分析に考慮すべき事項は次のようになる。

1. 社会的文脈における関係
2. 場面的文脈における関係
 - ① 伝え手および受け手の役割
 - ② 伝達場面の構成

このような事がらによって、個々の伝え手と受け手の交互作用のあり方—伝え手の役割の実行方法、受け手の反応などを含む—が影響を受けると考えられる。

ここで試みに設定された、性教育絵本への3つのアプローチ—もちろん、相互に密接に関連し合っているのだが—は、前節の〔A〕と照合されながら行なわれるべきであろう。現在、わたくしたち「おとな」が持っている「性」についてのイメージ、価値観自体を検討し、子どもたちにその中の何をどのように伝えてゆくか、そして、それを子どもたちがどう受けとめ、子どもたち自身の「性」をどう創ってゆくことになるかという展望—そもそも「性」は「教育」すべきものなのかというような論議も含め—との関係が常に確認されるべきであろう。

引用文献

- 1) 羽仁未央ほか訳 1977 きみが生まれる前のこと 現代性教育研究 通巻第20号,103—110,小学館
- 2) 絵理府青少年対策本部編 1971 青少年の性意識
- 3) 田草川まゆみ訳 1974 ゼロ歳から二歳児の性教育 現代性教育研究 通巻第9号,36—41
- 4) 石原準子ほか 1982 幼児を持つ母親の性教育に対する考え方の調査結果 第13回日本看護学会集録—母性看護—,11—14
- 5) 遠藤幸子 1981 赤ちゃんパンザイ (附表参照)
- 6) 佐々木宏子 1980 絵本—心理学からの研究視点をさぐる— 藤原喜悦ほか編 児童心理学の進歩—1980年版— 309—330 金子書房

附表 「性」を扱った幼児・児童用図書一覧（1982年12月現在）

分類	書名	初*1 版 年	文 (訳)	絵	発 行 所	対*2 象	扱　　っ　　て　　い　　る　　事　　項　　*3													備　　考
							男 女 的 差 異	第 一 次 性 徴	感 情 ・ 恋 愛	結 婚	性 交	受 精	胎 児 の 成 長	妊 娠	出 産 ・ 誕 生	授 乳	成 赤 ち ゃ ん の 長	動 交 尾	物 誕 生	
I-1	赤ちゃんはどこからくるの？	1955	S・M・グルエンベルグ (村岡花子)		中央公論社	3～12才	○		○	○	○	○	○	○	○				(絶版)	
	赤ちゃんはどこからくるの？	1967	同上	五百住乙	あすなろ書房	同上				(同			上)							
	親と子の性教育① おかあさんはうちゅうせん	1971	福世武次	山中正光	講学館	4～9才	○						○	○						
	なぜなのママ？	1972	北沢杏子	やなせたかし	アーニ出版	3才～	○	○	○				○	○	○	○			*性教育絵本。(挿入のカード)	
	ぼくどこからきたの？	1974	ピーター・メイル (谷川俊太郎)	アーサー・ロビンズ	河出書房新社		○			○	○	○	○	○	○				*あるがままのいのちのはなし。 (副題)	
	幼児性教育の絵本 どうしてなの？ママ	1978	ステン・ヘグラ (高橋和夫)		インクナル出版		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	あかちゃんがうまれる	1978	A・ロザンステュー (庄司洋子)	A・ロザンステュー	草土文化		○		○	○	○	○	○	○	○	○			*愛や性について。 (お父さん、お母さんへ)	
	赤ちゃんバンザイ	1981	遠藤幸子	中村正俊	盛書房				○	○	○	○	○	○	○	○	○		*性の解放は生の解放。 *性教育。(作者のことば)	
I-2 童話・図鑑	あかちゃんはこうしてできる	1982	P・H・クヌートセン (北沢杏子)	P・H・クヌートセン	アーニ出版		○			○	○	○	○	○	○				*自分の生命と両親のかかわり。 (訳者のことば)	
	こんにちは／しょちょうさん	1982	北沢杏子	津田裕冬	アーニ出版		○	○		○	○	○	○	○	○				*性を学び人生を語る。 (作者のことば)	
	ママだけのティッシュってなに —おんなのこのほん—	1981	入江幸子	奥田怜子	第一法規		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	*性教育童話。 (あとがき)	
	親と子の性教育② おかあさんは宇宙船	1981	福世武次	加藤新ほか	講学館	10才～	○	○	○	○	○						○	○	○	
	ぼくのもババみたいになるの かな —おとこのこのほん—	1982	入江幸子	原ゆたか	第一法規		○	○	○				○	○			○	○		*性教育童話。 (あとがき)
	かわいいあかちゃん	1968	かこさとし	富永秀夫	童心社	4～8才								○	○	○		○	○	
	あなたのおへそ	1976	かこさとし	かこさとし	同上									○	○	○		○	○	*「生と性」とを知ってほしい。 (あとがき)
	ひとのからだ	1977	毛利子来	帆足次郎	岩崎書店		○							○	○	○				
II	赤ちゃんばんざい第2集 あそぼう	1981	遠藤幸子	早川和子	盛書房		○									○				
	赤ちゃんのはなし	1982	マリー・ホール・エツ (坪井郁美)	マリー・ホール・エツ	福音館書店								○	○	○	○	○			

*1 訳本の場合は日本での初版年 *2 本の中に明確な表示のあるもの *3 「性」に関するものに限り、特に分類Ⅱについては、ここで取りあげた事項以外のものを内容に含んでいるものが多い。